

# 日蓮宗教学史における長松日扇の一考察

武 田 悟 一

## はじめに

長松日扇（清風・一八一七—一九〇）は、安政四（一八五七）年一月一二日、京都新町蛸薬師南の百足屋町（京都市中京区）谷川浅七郎宅において、華洛本門佛立講を開講している。その日扇を、日蓮滅後の教学史上に位置づけるとすると、どのような評価がなされるのであろうか。

執行海秀氏の指摘によれば、日扇は慶林坊日隆（一三八五—一四六四）を派祖とする八品門流教団の在家講の一つとして出発していること。また日扇は、成仏論をめぐって諍論されている皆久論争（三途成不論争）において、人界成仏を主に置く久遠派の巨頭として、十界成仏を主張する皆成派に對して論陣を張っていること。さらに日扇は、佛立宗の名称を従来の八品門流の正統派の呼称として用い、皆成派の教学に批判を加え、一家の教学を樹立している、との評価がなされている<sup>(1)</sup>。

ところで、執行氏の指摘からは、以下三つのキーワードが注目できる。第一に、教団史的には江戸時代末期の日蓮教団の特徴の一つである在家講の勃興という一側面がみられること。第二に、教学史的には皆久論争の問題があること。第三には、佛立宗の名称について問題があることである。そこで、本稿においては、これら三つの点に注目し、教学史上の日扇について少しく検討を試みたい。

## 一 八品門流における在家講について

まず教団史の視点から、日扇の在家講をはじめ八品門流においては、在家講が勃興しその活動が顕著である。いまこれらの在家講を列挙すると、つぎの通りである。

① 江戸八品講—文政四、五（一八二二、三）年頃、舜龍院日蒼（一七七六—一八三八）が江戸本所において開講。

② 浪華八品講—天保二（一八三一）年頃、日蒼の弟子事妙院日然（一七九二—一八六二）が、和泉国（大阪府）堺の

顕本寺住職に就任後間もなく開講。

③ 高松八品講—弘化三（一八四六）年春、讃岐国（香川県）

高松藩八代藩主松平頼儀（一七七五—一八二九）の庶子、

松平頼該（一八〇九—一八六八）が、高松藩士で江戸八品講講

頭の三浦吉之丞（一八四六）を講頭に迎えて開講。

④ 華洛本門佛立講—日扇が開講。

⑤ 京都八品講—日然の弟子教実院日化に教導を受けた岩佐

利兵衛（一八二三—一八九五）が京都において開講。

これら在家講の活動は、燎原の火の如き勢いをもって全国に展開している。しかし、明治時代初期の廃仏毀釈による弾圧、あるいは講の組織を統率する後継者の問題等でその多くの在家講は衰退したが、日扇の華洛本門佛立講はその後発展し、昭和二一（一九四六）年、法華宗より本門佛立宗として独立していることは、教学史上注目すべきと言えよう。

## 二 皆久論争について

ついで、教学史の視点から、華洛本門佛立講開講時における教学の面に注目してみると、八品門流においては、法華経信仰による成仏について、十界は皆成であるか、あるいは人界に限るのかという皆久論争がまさに興起した時期であると指摘できる。

そもそも、当時の八品門流における成仏論は、尼崎本興寺

（本興寺本能寺の両山四八世）忍定院日憲（一六九五—一七七〇）による下種成仏論を中心として展開するに至った。日憲の成仏論は、その後、尼崎勸学院能化の撰事院日秀（一七三二—七七）と、光長寺三五世大乘院日随（一七二七—一八〇六）、淡路妙京寺の守真院日専（一七一五—一八九）後の本興寺両山五四世に継承され、明和六（一七六九）年には、皆久論争の淵源ともなる回向通不を中心に成仏論を論議している。<sup>(2)</sup>

この三者による論議は、八一年後の嘉永三（一八五〇）年七月、僧守進（後の光長寺五〇世貫名日政・一八一八—一九〇二）と高松八品講主松平頼該との回向通不の法論によって顕在化した。すなわち守進は、回向即成を主張するが、頼該は日秀教学の系統を継承している立場から守進を論破している。論破された守進は、その後日随、日専、さらには江戸八品講の日蒼の教学を継承した浪華八品講主事妙院日然の説を用いて三途も即成可能と主張し、回向の通不から三途の成不へと論争が展開しているのである。そして守進、日然、京都八品講主岩佐利兵衛などの三途成仏を主張する派は皆成派となり、これを本興寺・本能寺の両本山を中心とする門流寺院が支持した。これに対し人界成仏を主張する頼該をはじめ、日扇の教学の指導者、本能寺（両山八二世）大覚院日肇（一七九四—一八五三）、日扇の出家時代の師僧である京都妙蓮寺四七世心光院日耀（一八一〇—一六三三）、日扇の活動を支えた在家者嶋田

弥三郎(一八二一—一八六)等が久遠派となり、これを妙蓮寺が支持し、教団内の政争問題へと発展するのである。

このような経緯の中において日扇は、安政三(一八五六)年八月『三途成不決断抄』<sup>(3)</sup>を著して、久遠派の主張が誤りであれば現罰を蒙る覚悟であると、仏祖三宝に祈誓していることから、久遠派こそ教団の正統であるという宗教的自覚が見られるのである。また日扇は、皆久論争を通じて松平頼該との信頼関係が築かれ、ひいては翌四年一月一二日の華洛本門佛立講の開講に至っているのである。

### 三 「佛立宗」の名称について

最後に「佛立宗」という名称に注目し、日蓮遺文、日隆聖教、日扇著述からたずねてみたい。

まず日蓮の真蹟遺文、曾存、直弟写本から佛立宗という表記を抽出すると『聖密房御書』<sup>(4)</sup>、『太田入道殿御返事』<sup>(5)</sup>、『一代五時図』<sup>(6)</sup>の各一箇所、そして『一代五時鶏図』<sup>(7)</sup>の四種から各一箇所の計七箇所確認できる。すなわち日蓮は、仏が立てられた宗のこと、あるいは最勝真実の法華経を依経とする天台法華宗のことを佛立宗であると理解していることが知られる。

ついで、日隆の聖教からは、管見の限りではあるが、天台宗と当家との相違を分別し、当家独自の教学を宣揚するため

に著された『法華天台両宗勝劣抄』<sup>(8)</sup>、『四帖抄』・永享七(一四三五)年以降)に一箇所、天台宗における四教五時の名目を本宗の立場から解説している『本門法華宗五時四教名目見聞』<sup>(9)</sup>(『名目見聞』・文安三、四(一四四六、七)年頃)に一箇所の計三箇所抽出できる。すなわち『四帖抄』の第四帖目において、日隆は、日蓮遺文の『法華宗内証仏法血脈』(真蹟なし)を引用して、佛立宗とは教主釈尊の立てられた宗であり、一乗の法は末法の悪人のために備えられたものであることを明らかにしている。また『名目見聞』において、佛立宗は本化上行菩薩が立てる所の宗であることが知られる。

さらに、日扇が佛立宗の名称を用いたことについて、今日現存する日扇の著述から確認してみると、管見の限り、①『高祖御一代記』<sup>(10)</sup>(安政五(一八五八)年)、②『大津佛立講開興由来』<sup>(11)</sup>(明治四(一八七二)年)、③『萬年永續繁昌記』<sup>(12)</sup>(明治一二(一八七九)年)が適切であるように思われる。

まず①で、天台大師が南三北七の誤りを破して一代仏法の正義を顕し、三大部を著して釈尊の立てる宗旨法華宗を弘めたことを用いて「釈尊が立てた宗派は佛立宗である。今当宗においては本門佛立宗と称するが故に本門佛立講あり」と記していることから、日扇にとって佛立宗は、久遠の釈尊の立てた宗であるとの自覚が確認できる。②からは、佛立講と称したのは、日扇の華洛本門佛立講が最初であり、それ以前は、

他の在家講と同じ八品講という名称を用いていたが、皆成派を支持する他の八品講と同じ名称は与同罪になるから、佛立講と改めていることが知られる。③では、佛立講は、日蓮滅後の日本国においての大講であり、前代未聞の講である。八品門流の正義、再興とあることから、日扇の佛立講は、八品門流の正統であり名称も正統派の呼称であるとの主張が看取できる。

### おわりに

以上、日扇の教学史上の位置づけを探るうえで、在家講・皆久論争・佛立宗という表記に注目し考察してきた。そこから確認できることは、日扇は八品門流入信から華洛本門佛立講開講に至る過程において、皆久論争の課題から日蓮、日隆の教学を継承した正統者という宗教的自覚のもと、皆成派に對して批判を加えていること。またそのことから、「佛立宗」の名称を用いて、八品門流の正統は華洛本門佛立講であると自負がみられる。これらの経緯によって日扇独自の教学が確立され、しかも在家講の存続発展につながっていると考えられる。そこで、日扇の教学内容についても検討の必要があるろう。これらのことについては、今後の課題としたい。

1 執行海秀稿「本門佛立宗教学の研究」(『大崎学報』第九七号)

日蓮宗教学史における長松日扇の一考察(武田)

- 昭和二五年)、同著『日蓮宗教学史』(平楽寺書店・昭和二七年)四〇六―四一二頁参照。
- 2 拙稿「長松日扇教学の一考察―皆久論争をめぐって―」(『日蓮教学研究所紀要』第三四号所収・立正大学日蓮教学研究所・平成二〇年)。
- 3 日扇聖人全集刊行会編纂局編『日扇聖人全集』(日扇聖人全集刊行会・昭和三二年―平成一六年(以下『扇全』と略記))第一卷四一頁。
- 4 立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』(身延山久遠寺・平成一二年改訂増補第三刷(以下『定本遺文』と略記))八二五―六頁。
- 5 『定本遺文』一一七頁。
- 6 『定本遺文』二二〇―一頁。
- 7 『定本遺文』二二二―三七、二二五―七、二二八―六、二二九―〇頁。
- 8 法華宗全書編纂局編『法華宗全書・日隆I』(法華宗全書刊行会・平成一一年)二七五頁。
- 9 野口日讓編『日蓮所立本門法華宗五時四教名目見聞』(佛立教学院・昭和三八年)一六頁。
- 10 『扇全』第一卷二〇五頁。
- 11 『扇全』第三卷三四八頁。
- 12 『扇全』第六卷八二頁。

〈キーワード〉 長松日扇、在家講、皆久論争、本門佛立宗

(立正大学大学院)